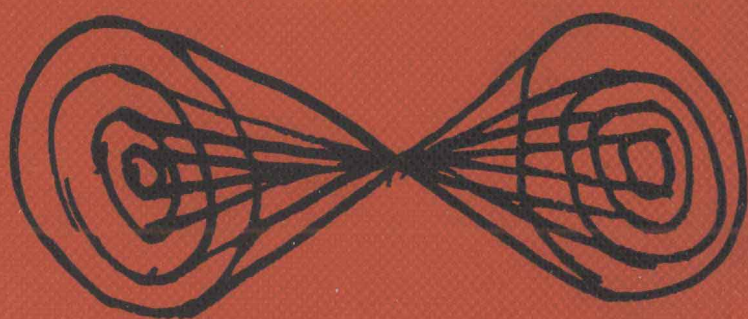




アラビア・ペルシア集

マホメット伝 けちんぼども 誤りからの救い 古詩抄 薔薇園 果樹園
カーブースの書 王書 ルバイヤート
精神的マスナヴィー 抒情詩

嶋田襄平・前嶋信次・藤本勝次・
牧野信也・蒲生礼一・黒柳恒男訳

世界文学大系

68

筑摩書房版

世界文学大系 68

アラビア・ペルシア集

昭和39年8月10日発行

訳者代表 蒲 生 礼 一

発行者 古 田 晁

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話 (291) 局 7651

目次

アラビア篇

マホメット伝

けちんぼども

誤りからの救い

古詩抄

ペルシア篇

薔薇園

果樹園

カーブースの書

王書

ルバイヤート

イブン・イスハーク
嶋田襄平訳 5

前嶋信次訳 50

ガッザリ
藤本勝次訳 99

牧野信也訳 132

シラーズのサアデー
蒲生礼一訳 157

シラーズのサアデー
蒲生礼一訳 226

ケイ・カーウース
黒柳恒男訳 244

フエルドウス
黒柳恒男訳 268

オマル・ハイヤーム
黒柳恒男訳 320

精神的マスナヴィー

抒情詩

アラブ文学史

近世ペルシア文学史

ルミ生礼一訳 347

シラーズのハーファイズ蒲生礼一訳 374

嶋田襄平 393

黒柳恒男 418

装幀庫田 綴

アラビア篇

マホメット伝

イブン・イスハーク
嶋田襄平訳

イブン・イスハークは本名をムハンマド、クンヤをアブー・アブド・アッラーと言ひ、七〇四年ごろメディーナで生まれた。イブン・イスハークというのは、イスハークの息子ということで、彼はもっぱらこの通称で知られている。イブン・イスハークの祖父ヤサールは、ハリド・ビン・アルワリードのイラク遠征軍が、六三四年、アイン・アッタムルで捕えた捕虜のひとつであった。当時戦争の捕虜は奴隷にされたのであるが、彼はメディーナに連れ来たられ、カイス・ビン・マフラマ家によつて解放され、そのマウラー（被護民）となつた。

ヤサールの孫イブン・イスハークは、最初ズフリー（七四二年没）についてハデイス（マホメットの行為および言葉に関する伝承）を学び、七三三年ニジブトに遊學して、さらにその地でハデイスを研究・蒐集した。しかしメディーナに帰ると、法学者マリーク・ビン・アナスをはじめとする學者たちの非難を受け、彼は追放同然の姿でこの地から去らねばならなかった。七四九年、イラクに姿を現わしたイブン・イスハークは、当時まだハーシミーヤに都していたアッバース朝

第二代目のカリフ、マンスールのもとを訪れ、書き記した著書の一部を献上した。これを嘉したマンスールは、彼を王子ムハンマド（のちに第三代カリフのマフディーとなる）の家庭教師に任命した。その後イブン・イスハークはアッバース朝の保護のもとに、今ここにその一部を訳出したマホメット伝を完成し、七六七年ごろバグダードで世を去つた。

イブン・イスハークのマホメット伝は、現在その原本は失われ、こんにちわれわれの利用しうるものは、タバリーの世界史などに引用された断片を別にすれば、イブン・ヒシャーム（八三四年没）の編集したその校訂本だけである。イブン・イスハークの原マホメット伝は、マホメット以前の預言者の歴史である第一部ムブタダー（開始）、誕生からヒジュラに至るまでのマホメット伝である第二部マブアス（使命）、ヒジュラからその死に至るまでのマホメット伝である第三部マガージー（征戦）からなる三部作で、かつその全体もまたマガージーと称せられていた。イブン・ヒシャームはこの書の第二部と第三部とから、彼のマホメット伝を編集し、これをシラー・ラスール・アッラー（神の使徒の伝記）、あるいはシラー・アンバウィーヤ（預言者の伝記）と名づけたのである。

また決定的なことを言ひうる段階ではないが、イブン・ヒシャームのシラーは、イブン・イスハークの原マホメット伝を、かなり忠実に再現しているようである。イブン・ヒシャームが新たに書き加えたところは、マホメットの妻たちに関する詳しい記事のような例外もあるが、概して言葉の説明や、固有名詞あるいは伝承の一部の異同の指摘など、非本質的な部分にすぎない。本訳はイブン・ヒシャームのシラーに収められた、イブン・イスハークの原マホメット伝（マガージーの

書）の翻訳であり、イブン・ヒシャームが新たに書き加えた部分で、読者の参考になると思われる記事は、これを脚注に指摘した。訳者の使用した底本は、ムスタファー・アッサッカーはか二名の學者が校訂した、一九五五年カイロ刊行の二冊本のシラーである。これは一九三七年に四冊本として刊行されたものの再版であるが、校訂の行きとどいた十分信頼のできる版である。いまマホメットの生涯を理解するために、もっとも重要と思われるいくつかの章を選んで訳出したが、ここに収めたものはシラー全体の十分の一にも至らない。ワーキディー（八二三年没）やイブン・サード（八四五年没）のマホメット伝に較べると、イブン・イスハークの書は記述の正確さにおいてやや劣るが、マホメットの人物像をいきよきと描きだしたところにその最大の特徴があり、また文学的にはもっとも興味あるマホメット伝である。

本書には古くヴァイルの独訳があつたが、最近英国のジロームも英訳を刊行した（A. Guillaume: The Life of Muhammad. A Translation of Ibn Is-hāq's *Strat Rasul Allah*. Oxford University Press, 1956）。しかし細部にわたって見ると、この細訳はかならずしも原文に忠実でないようである。したがつて訳者は、アラビア語原文によつてシラーを研究しようとする日本の学生たちのことを考え、たとえ日本語としての美しさはある程度犠牲にすることがあつても、できるかぎり原文を忠実に翻訳することにつとめた。また数多くの脚注は、これを煩雑と思う人もあるが、すべて内容のよりよい理解を目的としたものである。本文中の（一）は説明のため、（二）は文意を明らかにするため、ともに訳者の補つた言葉である。

神の使徒をみごもったときア

ーミナに語られたこと

人びとの語るところによると——それがほんとうであるかどうかは神だけの知りたもうことであるが——神の使徒(マホメ)の母、ワフブの娘アーミナは神の使徒をみごもったとき、「そなたはこの民族(アラブ)の支配者をみごもった。彼が生まれたら『すべてのねたみを持つ人びとから守るため、私は彼をただひとりのかた(神)の保護にゆだねます』と言い、そして彼をマホメットと名づけよ」という声を聞いたと語っていたという。彼女が神の使徒をみごもったとき、彼女のからだから光が輝き出て、彼女はその光によってシリアの国のブスラーの城を見ることができた。神の使徒の父、アブド・アルムッターの息子アブド・アッラーはその後まもなく、妻アーミナがマホメットをみごもっているあいだに死んだ。

神の使徒の誕生とその乳飲み

子時代

神の使徒は象の年、三月十二日の月曜日に生まれた。アブド・アッラーの息子ムッターリブが伝え聞いた私に語ったところによると、彼の祖父カイスは、「私と神の使徒とは、『同じ』象の年に生まれました。われわれは『幼いときよく』

けんかをしたものです」と言ったという。イブラーヒームの息子サーリフが、アブド・アッラーの息子ヤフヤーから聞いて私に語ったところによると、サービトの息子ハッサーンが彼(ヤハ)と同じ部族のものに、「私が七歳あるいは八歳で、私の聞いたことをすべて理解できる年ごろだったころ、ひとりのユダヤ人がヤスリブのとりでのいただきで大声をあげて、『おおユダヤの人びとよ』と叫び、人びとが彼のもとに集まって来て、『ええ、いまいましい。いったい何ごとが起こったのだ』と尋ねますと、彼が『今夜、その下でアフマド(マホメ)の生まれた星が登ったぞ』と叫ぶのを私は聞きました」と語ったのを聞いたということである。私がハッサーンの孫サイードに、「神の使徒さまがメディナにおいてになったとき、ハッサーンは何歳でしたか」と尋ねると、「六十歳でした」と答えた。神の使徒はメディナに到着されたとき五十三歳だったので、ハッサーンが〔前述のこと〕を聞いたとき、彼は七歳だった〔ことになる〕。

神の使徒を生んだとき、アーミナは神の使徒の祖父アブド・アルムッターリブに人をやり、「あなたの孫が生まれました。来てこの子を見てやってください」と伝えさせた。そこでアブド・アルムッターリブがやって来て、孫を見た。アーミナは彼に、彼女がみごもったときに見たものと、それについて彼女に語られたことと、その子をマホメットと名づけるよう命ぜられた

ことを話した。人びとの述べるところによると、アブド・アルムッターリブはマホメットを連れてカーバにはいり、立つて神に祈り、彼に授けられたものを神に感謝した。やがてアブド・アルムッターリブはマホメットをその母のもとに連れ帰って彼女に渡し、神の使徒のために里親を探した。かくしてサード・ビン・バクル部族の、アブー・ズアイブの娘のハリーマという婦人が、彼の里親となるように頼まれた。彼女のつれあいの名前はアブド・アルウッザーの息子のハリサで、乳兄弟にアブド・アッラー、乳姉妹にウナイサとホザーファとがあった。ホザーファはシャイマー〔ともよばれ〕、この名前のほうが彼女の本名〔ホザーファ〕よりも通りがよく、彼女と同じ部族の人びとのあいだでは、この〔シャイマーという〕名前しか知られていなかった。彼らはすべてハリーマの実子だった。神の使徒が彼らとともにいたあいだ、シャイマーは母を助け、よく彼をだいていたといわれる。ハーティブの息子ハリスのマウラー、アブー・ジャフムの息子ジャフムが伝え聞いて私に語ったところによると、神の使徒の里親、サード部族のアブー・ズアイブの娘ハリーマは、よく次のように語っていたという。「私はサード・ビン・バクル部族の女たちを連れて、夫や私が乳をやっていた小さな子供たちといっしょに、里子を探してくに出ました。それはひでりの年で、私たちには『食べるものは』何一つ残っていませんでした。私は緑がかった色をした雌

ろばに乗り、一滴も乳を出さない年老いた一頭
の雌らくだを連れていました。連れていた子供
たちが飢えに泣くので、私たちは夜通し眠るこ
とができませんでした。私の乳房はなんの役にも
立たず、年老いた雌らくだの乳房も乳を出し
ませんでした。しかし私たちは雨と慰めを期
待していましたが、私は疲れはてていて人の
乗ることを拒み、そのため人びとの重荷となっ
ていたかの雌ろばに乗って出発し、ついにメッ
カに着いて里子を探しました。私たちが女のすべ
てに、神の使徒さまが里子の候補として出され
ましたが、私たちは赤ん坊の父親から謝礼を受
け取ることを欲していましたので、使徒さまが
孤児であることを聞かされたとき、だれもが使
徒さまを里子とすることを拒みました。私たち
は言ったのです。『みなし児だと。その子の
母親や祖父に、いったい何ができるのでしょ
う』と。だから私たちは、使徒さまを「里子と
すること」をきらったのでした。やがて私を除
き、私といっしょにやって来た女たちはひとり
残らず、里子「とする赤ん坊」を決めました。
私たちの意見が一致して出発することになった
とき、私は夫に『神かけて、里子を引き受ける
ことなく仲間といっしょに帰ることは、私はい
やです。神かけて、私はあのみなし児のところ
に行き、あの子を里子にしましょう』と言いま
した。すると夫は、『おまえにはそうする義務
はない。しかしおそらく神は、そのことについ
て私たちを祝福したもうだろう』と答えました。

そこで私はみなし児のところに行き、ほかに里
子を見つけることができなかったという理由だ
けで、神の使徒さまを里子とすることに決めま
した。私が使徒さまをだいて私のらくだのかご
のところに行き、使徒さまを私の胸にあてがう
と、私の二つの乳房は乳をいっばいに出し、使
徒さまも乳兄弟も乳びたしになるまでそれを飲
み、やがて二人とも眠ってしまいました。これ
が、私たちが使徒さまと寝た最初でした。
「私の夫は立つて例の年老いた雌らくだのこ
ろに行きましたが、見よ、その乳房はいっばい
に張っています。夫はそれから乳を絞り、彼と
私とは渴がいて満足するまでその乳を飲み、さ
私たちは幸福な夜を過ごしました。翌朝目をさ
ましたとき、夫は私に『おまえは知っているか
神かけて、おおハリーマよ。おまえはたしかに
祝福された人を「里子に」選んだのだな』と言
いました。『神かけて、私もたしかにそう思
います』と私は答えました。それから私たちは出
発し、私は神の使徒さまをだいて私の雌ろばに
乗りましたが、そのろばはほかのろばが追いつ
けないほどの早い歩調で進みましたので、私の
仲間たちは私に、『やいやい、アブー・ズアイ
ブの娘よ。私たちを待っておくれ。それはあな
たが乗って来たのと同じ雌ろばではありません
か』と言いました。そこで私が『まさにそのと
おり。神かけて、まさにそのとおり』と答えま
すと、彼女たちは『神かけて、その雌ろばには
何か驚くべきことが起こったにちがいない』と

言いました。

「それから私たちはサード部族のくにの、私た
ちの幕営地に着きましたが、私は神の土地のう
ち、それよりも不毛の土地のあるのを知りませ

(1) 本書では慣用によつてマホメットと記すが、正しくは
アラビア語でムハンマドという。こよなくたたえられたも
のという意である。

(2) 東ローマ帝国の要衝ボストラ。現在ではシリア共和国
南部のドルーズ山地の、西の麓にある一寒村にすぎない。

(3) イェーメンを支配していたアビシニアの將軍アブラハ
が、象軍を率いてメッカを攻撃した年。西暦五七〇年。あ
るいは五七一年のことと推定されている。

(4) アラブ史学の方法論の一特徴として、ハディース（伝
承）を記す場合、それが語りつがれた過程を示す記録をつ
ける。これをイスナードという。イスナードはしばしば繁
雑にわたり、特殊の研究者以外には無用のことが多いので
本訳においてはその一部を省略することがある。その場合
にはかならず、「伝え聞いて」という訳語を用いる。

(5) メディナの古名。この町はマホメットの移住後、メイ
ーナ・アブナビー（メディナはそのなまり）となった。

(6) イエスが自分の名に現われると預言したとされる預
言者の名前あるいは称号（「コーラン」第六十一「章第六節」）
アフマドはハンマドと同じく、大いにたええられべき
ものを意味するが、かような記事は新約聖書には見られな
い。このアフマドをマホメットの別名とするのは、このイ
ブン・イスハークの記事が最初のものである。

(7) マウラーというアラビア語は、一、自分の部族を離れ
て他の部族に属し、その保護を受けているもの。二、かつ
て奴隷だったものが解放されてもとの主人の法的な保護
を受けているもの。三、アラブ以外の民族でイスラム教徒
となったものを意味する。この場合は第二の意味のマウラ
ーである。

ん。私たちが使徒さまを連れて帰って来たとき、私の羊たちは、ちょうどたくさん乳を出そうとしていました。そこで私たちは乳を絞ってそれを飲みましたが、他の人びとは一滴の乳も絞ることができず、また〔彼らの羊の〕乳房に乳を見つけることができませんでした。そこで私たちの部族の羊の持ち主たちは彼らの牧童に、『こん畜生。アブー・ズアイブの娘の牧童が放牧するところに羊を連れて行け』と言いました。しかし彼らの羊は腹をすかして一滴の乳も出さず、私の羊はたくさん乳を出していました。そして私が神の使徒さまに乳をふくませていた二年間、私たちはこの繁栄を、神さまからのたまものとみなしつづけていました。使徒さまはほかの子供たちに見られないほどの發育ぶりを示し、二歳にならないうちに、りっぱに成長した子供になりました。〔使徒さまが乳離れしましたので〕、私たちは使徒さまを母親（*マ*）のもとに連れて行きましたが、私たちは使徒さまのもとに神の祝福を見ていましたので、使徒さまが私たちのもとに留まることをせつに願っていました。そこで私たちは使徒さまの母親と話し、私は『あの子が完全に成長するまで、あの小さい私の子を、私のもとに残しておいてくださればありがたいのですが。私はあの子のためにメッカの疫病を恐れます』と申しました。私たちが繰り返してそう頼みつづけたので、とうとう彼女は使徒さまを私たちといっしょに帰しました。そこで私たちは、使徒さまといっ

しょにくにに帰りました。そして神かけて、私たちがくにに帰ってから数カ月たったとき、神の使徒さまと乳兄弟とは、私たちのテントの裏で小羊たちといっしょにいました。そのとき乳兄弟が急いでやって来て、『白い衣を着た二人の男の人が、私のクライシュ部族の兄弟（*マホム*）をおさえつけ、腹を切り開いてそれをかき回しています』と、私と夫とに言いました。そこで私と乳兄弟とが、急いで使徒さまのところに駆けつけてみますと、使徒さまは顔色を変えて立っていました。私と乳兄弟とは使徒さまをつかまえて、『いったいどうしたのです。私の小さい子供よ』と尋ねました。すると使徒さまは、『白い衣を着た二人の男が私のところにやって来て、私をおさえつけ、私の腹を切り開いて何か探していました』と答えました。そこで私たちはわかりません』と答えました。そこで私たちは使徒さまを連れてテントにもどりました。夫は私に、『ハリーマよ。この子は病氣にかかったらしい。そのことがはつきりする前に、この子を家族のもとに連れて帰るなさい』と言いました。そこで私たちは使徒さまを連れて、母親のところにきました。すると彼女は言いました。『おお乳母よ。あなたはなぜ来たのです。以前あなたはこの子のことに、そしてこの子をあなたのもとに引き留めておくことに熱心でしたのに。』そこで私が『神は私の子供をこまめに成長させたまい、私は義務を果たしました。しかし私は、この子に何か変わったことが起

つたのではないかと心配し、そこであなたのご希望どおり、この子をあなたのもとに連れて来ました』と言いますと、彼女は『いったいどうしたのですか。正直にお話しなさい』と言います。私がすっかり話まで彼女は私を許しませんでした。『あなたは悪魔を恐れますか』と彼女は尋ねました。『はい』と私が答えますと、『いな神かけて、悪魔は彼をどうすることもできません。私の小さい子供には、〔ほかの子供たちと違った〕何かがあります。私はあなたに、この子のことを話してませんでしたか』と彼女は尋ねました。『はい、〔うかがいました』と私が答えますと、彼女はつづけました。『私がこの子を見ごもったとき、私は一条の光が私から〔輝き出て〕、シリアの國のブスラーの城を照らし出したのを見ました。それから私はこの子を見ごもりましたが、神かけて、私はあれよりも軽い妊娠を見たことはありません。私がこの子を生んだとき、この子は両手を地上に置き、頭をまっすぐ天に向かってあげました。この子を手離し、そして心正しく行きなさい』と――

ヤジードの息子サウルがある学者――私はそれを、マードーンの息子のハーリド以外の人ではありえないと考えるが――から聞いて、私に次のように語った。『数名の神の使徒さまの教友が、使徒さまにご自分のことを語ってくださいよう、お願いしたことがあります。『よろしい』と使徒さまはお答えになりました。『私はわが父イブラーヒム（*アブラ*）の祈りで、わが兄

弟イーサー(イエ)の福音なのだ。私の母は私を
 みごもつたとき、彼女から一条の光が輝き出て、
 彼女のためにシリアの城を照らし出すのを見ま
 した。私はサード・ビン・バクル部族に里子と
 して出され、私が乳兄弟といつしよにテントの
 裏手で子羊の番をしていたとき、白い衣を着た
 二人の男が、雪をいっばいに盛った金の鉢を持
 って私のところにやって来ました。それから二
 人は私をつかまえて腹を開き、心臓を取り出し
 てそれを切り開き、中から何か黒いものを取り
 出して放り出し、すっかりきれいになるまで、
 私の心臓と腹とをかの雪で洗い清めました。そ
 れからひとりがもうひとりに、「彼と同胞十名
 のものの重さを較べて見よ」と言いました。較
 べてみると私のほうが重たかった。するとその
 男は、「彼と同胞百名のものの重さを較べて見
 よ」と言いました。較べてみると私のほうが重
 たかった。彼は(さらに)「彼と同胞千名のも
 のの重さを較べて見よ」と言いました。較べて
 みると私のほうが重たかった。そこで彼は言
 いました。「もうよい。行かしてやれ。神かけて、
 たとえ彼と全同胞の重さを較べたとしても、彼
 のほうが重たいだろう」と」

神の使徒はよく、「羊の番をしなかつた預言
 者はいない」と言っていた。人びとが「神の使
 徒さま。あなたも「羊の番をなさいました」
 か」と尋ねると、「私もだ」と答えた。神の使
 徒はよく彼の教友たちに、「私はそなたたちの
 うちで、もっとも典型的なアラブだ。私はクラ

イッシュ部族の出身で、サード・ビン・バクル部
 族に里子に出された」と言っていた。

ある人びとが主張して言うところによると――
 うそれがほんとうかどうかどうかは神だけの知りたも
 うことであるが――神の使徒のサード部族の母
 親(ハリ)が彼を連れてメッカに來たとき、神の
 使徒は彼を家族のもとに連れて行くとしてい
 た母親と、人ごみの中ではぐれてしまい、彼女
 は彼を探したが見つかることができなかった。
 そこで彼女はアブド・アルムッターリブのところ
 に行き、「私は今夜マホメットを連れて來まし
 たが、私がメッカの北「の高台」にいたとき彼
 は私からはぐれました。そして神かけて、私に
 は彼がどこにいるのかわかりません」と言った。
 そこでアブド・アルムッターリブはカーバのもと
 に立ち、彼を帰してくれるよう神に祈った。人
 びとの主張するところによると、ナウファルの
 息子ワラカと、もうひとりのクライッシュ部族の
 ものがマホメットを見つけて、アブド・アルム
 ッタリブのもとに連れて來た。二人は言った。
 「これがあなたのお孫さんです。私たちはこの
 子をメッカの北「の高台」で見つけました。」
 アブド・アルムッターリブは彼を抱き上げて肩車
 をし、神の加護を求め、彼のために神に祈りな
 がらカーバの周囲を回り、それから彼を母親ア
 ミナのもとに送りとどけた。

ある学者が私に語ったところによると、ハリ
 マがアーミナに告げたことのほか、彼女が神
 の使徒をアーミナに帰した理由の一つは、次の

ようなことであつた。離乳の終わったのち、ハ
 リーマが神の使徒を連れてメッカに帰つて來た
 とき、数名のアビシニア人のキリスト教徒が二
 人を見かけ、彼を熟視して彼女に彼のことを尋
 ね、熱心に彼のことを考えた。それから彼らは
 彼女に言った。「この子をわれわれの国王、そ
 してわれわれの國に連れて行かせてください。
 なぜならこの子には何かがあるようです。われ
 われはこの子のことを知っています」と。この
 ことを私に語つた人は、彼女は彼を連れて、や
 つつのことで彼らから逃げ出したのだと主張し
 た。

アーミナとアブド・アルムッ タリブの死

神の使徒は母親アーミナと祖父アブド・アル

(1) アラビア語のハーディルは、ふつう遊牧民に対して定
 住民を意味するが、この場合は牧童に対して羊の所有者、
 つまり自分は村にとどまり、牧童を使って羊を放牧させる
 人を意味していると考えられる。

(2) 原文は「彼の父」であるが、これはもちろんハリーマ
 の夫、アブド・アルムッターリの息子ハリスをさしている。

(3) カーバを回することは、ジャヒーリヤ(イスラム以前)
 時代の多神教の宗教儀礼の一つであつた。それはのち、
 イスラム教の巡礼の儀礼にもとりいれられて、タワーフと
 称せられ、マホメットの訣別の巡礼の先例により、カーバ
 の周囲を七回まわることになった。

(4) 原文では「ハリーマを「サード部族の母親」とし、アー
 ミナをただ「母親」という。

ムッタリブとともに、神の保護と配慮のもとに暮らした。神は彼のことを気づかいたもうたので、彼を良い植物のように育てたもうた。そして神の使徒が六歳になったとき、彼の母アミナは死んだ。アブー・バクルの息子アブド・アッラーは、「神の使徒さまが六歳のとき、使徒さまの母アミナはメディナにいた実家の兄弟を訪れるため、神の使徒さまを連れてメディナに行った帰り道、メッカとメディナとのあいだのアブワールでなくなりました」と私に語った。かくして神の使徒は、祖父アブド・アルムッタリブとともに暮らすことになった。アブド・アルムッタリブは「昼寝のため」、カーバの陰にベッドを設ける習慣があり、彼の子供たちはいつも、彼が来るまでそのベッドの周囲に坐っていた。しかし彼らは彼を尊敬していたので、息子たちのうちだれひとりとしてそのベッドの上には坐るものはなかった。しかしやつと乳離れした神の使徒が、ちょこちょこ出て来てその上に坐るので、彼のおじたちはいつも彼をつかまえて追ひ払っていた。それを見たときアブド・アルムッタリブは、「私の孫にかまうな。神かけて、この子には何かがある」と言った。それから彼をベッドの上にいっしょに坐らせ、手で彼の背中をなでてやるのであった。神の使徒がそうするのを見ることは、アブド・アルムッタリブをよるこぼせるのであった。神の使徒が八歳になったとき、アブド・アルムッタリブは死んだ。それは象の年から八年後のことであ

った。アブド・アッラーの息子アッパースが、彼の家族のひとりから聞いて私に語ったところによると、アブド・アルムッタリブが死んだとき神の使徒は八歳だったという。

アブド・アルムッタリブが死んだとき、彼の息子アッパースを、息子たちのうちでもっとも年少だったにもかかわらず、彼のあととザムザム〔の泉の管理〕と〔巡礼へのその〕水の供給の仕事に任命した。それはイスラムの勝利の日まで依然として彼の手中にあり、神の使徒は過去における彼への任命を承認した。アッパースがそれに任命されたがゆえに、それはこんにちまでアッパース家に属している。

アブー・タリーブ、神の使徒の保護者となる

アブド・アルムッタリブの死んだのち、神の使徒はおじのアブー・タリーブのもとで暮らした。人びとの主張するところによると、神の使徒の父親アブド・アッラーとアブー・タリーブとは、ともに母親アムルの娘ファアティマを同じくする同腹の兄弟だったので、アブド・アルムッタリブはアブー・タリーブに神の使徒の世話をするよう遺言したという。〔かくして〕アブー・タリーブはアブド・アルムッタリブの死後、神の使徒のめんどろを見ることになり、神の使徒は彼のもとに行き、いっしょに暮らすことになった。アッパードの息子ヤフヤーは彼の

父親から聞いて、私に次のように語った。

「リフ部族出身のある占い師がいました。クライシュ部族の人びとは彼がメッカに来るたびごとに、彼に子供を見せてその将来を占ってもらうため、いつも子供たちを彼のもとに連れて来るのでした。そこでアブー・タリーブもほかの人びとといっしょに、まだ子供だった神の使徒さまを連れて占い師のもとに行きました。占い師は使徒さまをちよつと見ましたが、すぐ別の何ものかが彼の注意をひきました。それを片づけたとき占い師は叫びました。『その子だ。その子を私のところに連れて来なさい。』占い師の異常な関心を見たアブー・タリーブは、使徒さまを占い師から隠しました。すると占い師はしゃべり出しました。『おまえたちに禍あれ。私がさつき見た子供を、もう一度私のところに連れて来なさい。神かけて、あの子にはたしかに何かがある』と。しかしアブー・タリーブは『その場を』去りました。

バヒーラーの話

それからアブー・タリーブは、隊商を率いてシリアへ行った。出発の準備がととのい旅の用意ができたとき、神の使徒と非常に密接な関係にあったアブー・タリーブは、彼を不憫に思い、人びとの主張するところによると、『神かけて、私は彼をいっしょに連れて行こう。そしてけつして彼を離さず、私も彼から離れまい』と――

あるいはそれに類したことを——言つたという。そこでアブー・タリブは、神の使徒を連れて出発した。隊商がシリヤの国のブスラーに着いたとき、キリスト教徒の学問に造詣の深いバヒーラーという修道士が、そこにいおりを結んでいた。この修道士は長いあいだそのいおりに住みつづけ、人びとの言うところによると、彼はそのいおりの中の代々伝えられた書物から、これらの学問を学んだことである。それより前、彼らはしばしばバヒーラーのそばを通り過ぎたことがあったが、かつてバヒーラーは彼らに話しかけたこともなく、また彼らのほうに出て来たこともなかった。しかしその年、彼らが彼のいおりの近くでひと休みしたとき、バヒーラーは彼らのためたくさんのご馳走を用意したが、それは人びとの言うところによると、彼がいおりの中にいたとき何ものかを見たからであるという。

人びとは次のように主張する。バヒーラーはいおりの中にいて、近づいて来る隊商のうちに神の使徒を見たが、たぐさんの人びとのあいだにあって、彼の上にだけ白雲が陰を作っていた。やがて隊商は進んでバヒーラーの近くの木陰でひと休みした。そしてバヒーラーが木の上に陰を作っていた白雲を見ると、木の枝が神の使徒の上に垂れ下がって、その下にいた神の使徒のために陰を作っていた。それを見たときバヒーラーはいおりから降りて来て、彼らに使いのものをやり、『クライシュ部族の人びとよ。私は

あなたがたのためにご馳走の用意をしました。老いも若きも、奴隸も自由人も、あなたがた全員のおいでくださることを私は希望します』と言わせた。彼らのひとり、が、『神かけて、バヒーラーよ。あなたはきょうたしかにどうかなさいましたな。私たちは今まで何回もあなたのそばを通りましたが、私たちのためにご馳走をしてくださったことはありませんでした。あなたはきょうどうなさつたのですか』と言うと、バヒーラーは彼に答えて、『あなたがたはお客です。ことは正しい。しかしあなたがたはお客です。私はつつしんであなたがたをおもてなしし、あなたがたの全員が食べられるよう、ご馳走をさしあげたいと思います』と言つた。そこで彼らはバヒーラーのもとに集まつたが、神の使徒は年が幼かつたので、人びとのかつたのかごの中に入れて、ただひとり木の下に残された。バヒーラーは「集まつた」人びとを見たとき、彼の知つていたしるしを見つぐことができなかつた。そこで彼は『クライシュ部族の人びとよ。あなたがたの全員を、ひとり残らず私のご馳走に連れて来なさい』と言つた。『バヒーラーよ。私たちのうちでもっとも小さく、らくだのかごの中に残されている子供を除いて、あなたのもとに来るべきものはだれひとりとして残っていません』と彼らが答えると、バヒーラーは『そんなことをしてはなりません。その子連れ来て、あなたがたといっしょにこのご馳走にあずかせなさい』と言つた。クライシュ部

族のひとりのものが、『アッラトとウッザーとにかけつて。われわれのうち、アブド・アルムツタリブの孫がひとりだけご馳走に来なかつたことで、われわれが非難されなければならないのか』と仲間のものに言い、それから彼は立つてマホメットのところに行き、彼を抱き上げて人びとといっしょに坐らせた。

マホメットを見るやいなや、バヒーラーはじろじろと彼を横目で観察し、彼がすでに彼の書物によつて知つていた何ものか(預言者)が、マホメットのからだにないかと探し始めた。人びとがご馳走を食べ終わって散つてしまつと、バヒーラーは立ち上がつて彼のところに行き、『子供よ。アッラトとウッザーとにかけつてお願いするのだが、私の尋ねることに答えてくださらぬか』と言つた。バヒーラーがそう言つた

(1) 原文は「アディナにいたアディー・ビン・アンナッジャヤル部族の、神の使徒の母がたのおじたち」とある。アディ部族はアミナナの出身の部族で、マホメットのおじたちというのは彼女の兄弟のことである。

(2) アブド・アッラーの息子アッバースは、アブド・アルムツタリブの玄孫にあたる。

(3) このあと八編の詩があるが、本文の内容と直接関係がないので省略した。

(4) カイバのかたわらにある神聖な井戸。イスラム教徒の伝承によれば、それは最初アブラハムによつて掘られたがその後枯渇し、アブド・アルムツタリブによつてふたたび掘られたという。

(5) ジャーヒーリヤ時代に人びとのあつた尊崇を受けていた、メッカの三女神のうちの二つ。あとのひとつはマナートである。

のは、クライシュ部族の人びとがこの二人の女神にかけて誓うのを聞いたからにすぎなかった。人びとの言うところによると神の使徒は、『アッラトとウッザーとにかけて私にお尋ねくださるな。神かけて、この二つのもの以上に私の憎んでいるものはほかにありません』と答えたという。『それでは神(ラジ)にかけて、私の尋ねることに答えてくださらぬか』とバヒーラーが言うと、『なんでもお尋ねください』と神の使徒は答えた。そこでバヒーラーは彼に、彼の眠っているときの状態や、彼のからだつきや、そのほか彼についていろいろのことを尋ね始め、神の使徒はこれに答えたが、それらはバヒーラーが彼の書物によって知っていたところと一致した。それから彼はマホメットの背中を調べて、彼の書物に記されていた両肩のあいだの「ある」個所に、預言者の捺印を認めた。

それが終わるとバヒーラーは、神の使徒のおじアブー・タリブのところに行き、『この子はあなたの何に当たるのですか』と尋ねた。アブー・タリブが『私の息子です』と答えると彼は『この子はあなたの息子ではありません。この子に父親の生きているはずはありません』と言った。アブー・タリブが『彼は私の甥です』と言うとバヒーラーは、『それでは彼の父親はどうしましたか』と尋ねました。『彼がまだ母親のおなかの中にいる間に死にました』とアブー・タリブが答えると、バヒーラーは言った。『あなたはほんとうのことを言いました。あなたの甥を連れて国に帰り、彼をユダヤ人から守りなさい。なぜなら神かけて、もし彼らが彼を見て私の知ったのと同じことを知れば、彼らはこの子に危害を加えるでしょう。このあなたの甥には、何か偉大なことがあります。だから急いで彼を国に連れて帰りなさい』と。

そこでシリアでの商売が終わったとき、おじアブー・タリブは急いで出発し、彼(神の使徒)をメッカに連れ帰った。人びとは次のように主張する。啓典の民のズライルとタンマームとダリースとは、おじアブー・タリブとともに行ったかの旅行の際にバヒーラーが見たと同じものを、神の使徒に認めた。そこで三人は彼を誘惑しようとしたが、バヒーラーは彼らを追ひ払い、神(のこ)と、啓典に見いだされる彼(神の使徒)についての記述と、たとえ彼らがいかに力を合わせて彼を誘惑しようとしても、彼に近づくことができないであろうことを彼らに思い出させた。バヒーラーは、彼の語ったことを彼らが理解してその真理を認め、「神の使徒から」手を引いて行ってしまうまで、彼らを説得しつづけた。かくして神の使徒は成長したが、神は彼に名誉と使徒の位とを授けようと欲したもうていたので、彼を保護し、偶像崇拜の汚れから彼を守りつづけたもうた。ついに彼が一人前の男になったとき、彼は彼の部族(クライシュ部族)の民のうち男らしさでもっともすぐれ、気性ももっとも美しく、隣人とのつき合いももっとも良く、忍耐力ももっとも強く、話すことももっとも信頼でき、誠実さももっとも大きく、悪を避け遠ざけるがゆえに、人びとを染める背徳と悪徳からもっとも遠かった。ついに彼は、神が彼の一身に集めた美德のゆえに、彼の部族民のあいだでアミーン(誠実)とよばれるに至った。

神の使徒のヘダイージャとの結婚

私の聞いたところによると神の使徒は、ジャーヒリーヤ(以前「時代」)の彼の少年期に、いかに神が彼を保護したもうたかについて、つね日ごろ次のように語っていたという。「私はクライシュ部族の子供たちといつしよに、それで子供たちが遊ぶような、だれかの石を運んでいました。私たちはみな裸になり、下着を取って首に巻きつけ、それに石を乗せて運んでいました。私も彼らといつしよに行ったり来たりしていましたが、そのとき何か見えないものが強く私をぶち、『下着をまとう』と言いました。そこで私は下着を取ってからだにまとい、石を首の上に乗せて運びはじめました。私の仲間のうち、下着をつけていたのは私だけでした」

フワイリドの娘ヘダイージャは、威厳と富とを兼ね備えた女商人だった。クライシュ部族の人びとは商業の民だったので、彼女も商売のことで人を雇い、彼女の提供したもので彼らに商売をさせ、利益を折半していた。彼女が神の使徒の正直さ誠実さ、そして気高い性格を聞いた

とき彼に人をやり、彼女の子供マイサラを連れて、彼女の品物をシリアに運んで商売してくれば、他の商人たちに払うよりも多く彼に与えようと申し出た。神の使徒はこの申し出を受け入れ、彼とハデーリヤの子供マイサラとは、彼女のその品物を持って出発し、シリアに到着した。神の使徒はひとりの修道士のいおりの近くで、木陰に休んだ。そのとき修道士が突然マイサラのところにやって来て、「この木の下で休んでいるかとはどなたかな」と尋ねた。マイサラが「かの人人は聖地の民、クライシム部族のかたです」と答えると、修道士は「いまだかつて預言者以外の人が、この木の下に休んだことはありません」と言った。

それから神の使徒は持つて来た品物を売り、買おうと思つたものを買ひ、マイサラを連れてメッカに帰つて来た。人びとの主張するところによると、真昼の非常に暑い最中、らくだに乗つて旅をしていたマホメットのために、二人の天使が陰を作つて太陽の光をさえぎつてゐるのを、マイサラは見たという。マホメットがハデーリヤの品物を持つて、メッカの彼女のところへ帰つて来たとき、彼女は彼の持ち帰つたものを売つて、二倍あるいはそれに近い売り上げをあげた。マイサラは修道士の言葉と、彼の見た二人の天使がマホメットのために作つた陰のことを、彼女に話した。ハデーリヤは決断力に富み、賢明で、神がそれによつてマホメットに名譽を与えようと欲したもうたもの(14)

を持つていた。彼女は神の使徒のもとに人をやり、人びとの主張するところによると、「おお私のいとこよ。あなたと同じ部族の人びとのあいだでのあなたの良い評判、あなたのまじめさ、そしてあなたの性格の良さとお言葉の信頼できることのために、私はあなたをお慕ひします」と言わせ、それから彼女は彼に結婚を申しこんだ。当時彼女はクライシム部族のうち、もつとも生まれの良い女性で、かついちばん気高くもつとも金持ちであり、だれもが、もしできるならばそれを彼女から得ようと欲していた。

ハデーリヤからこのことを聞かされた神の使徒は、そのことを彼のおじたちに語り、彼のおじのひとり、アブド・アルムッタリブの息子ハムザが、彼とともにアサドの息子フワイリド(ハデーリヤの父親)のもとに行き、彼女との結婚を求め、かくしてマホメットはハデーリヤと結婚した。イブラーヒームを除く神の使徒の子供たちのすべて、すなわちカーシム——マホメットはこの子によつて、アブー・アルカーシムというクンヤをもつていた——ターヒル、タイイブ、ザイナブ、ルカイヤ、ウンム・クルスームおよびフアーティマは、みなハデーリヤが生んだ。カーシムとタイイブとターヒルとはジャーヒリヤ(時代)に死んだが、娘たちはすべてイスラム時代まで生きのびてイスラム教徒となり、マホメットとともに(メデイナに)移住した。フワイリドの娘ハデーリヤは、キリスト教徒で聖書を研究して学識の深かつたといふこと、ナ

ウファルの息子ワラカに、彼女の子供マイサラが話して聞かせた修道士の言葉と、彼の見た二人の天使がマホメットのために作つた陰のこと(1) イブン・ヒシャームによれば、それは吸いふくべのような形をしていたという。

(2) 啓典の民とは神から啓示の書物を授かつたもの、つまりユダヤ教徒とキリスト教徒とを意味する。ただしこの三人がユダヤ教徒であつたかキリスト教徒であつたかは、明らかでない。

(3) アラビア語のイザールは、からだの下半分をおおう腰巻きのような下着である。

(4) イブン・サードのマホメット伝によると、この修道士の前名はナストゥール(ネストリウス)といつた。

(5) 原文は「おお私のおじの息子よ」とあるが、マホメットとハデーリヤとはいはれど関係はない。おじというアラビア語アムムはしゅうとを意味することもあるので、ハデーリヤがマホメットとの結婚を前提として、「おお私の夫よ」という意味でこう呼んだのではないかと考えられる。あとに訳出するように、結婚後ハデーリヤはマホメットに、「私のいとこよ」と呼びかけている。

(6) 原文には、このあとハデーリヤの長い系譜(ナサブ)があるが、繁雑にわたるので訳出を省略した。

(7) イブン・ヒシャームによれば、このときマホメットは二十五歳で、ハデーリヤは四十歳だつたといふ。

(8) イブラーヒームの母親は、のちにエジプトの支配者からマホメットに献上された、コプト人の女奴隷マリーヤであつた。この子も幼いうちに死んだ。

(9) タンヤとはだれその父親というアラビア式の呼び名で、ふつと長男の名前を用いる。アブー・アルカーシムはカーシムの父親(アルは定冠詞)を意味する。

(10) マホメットの子供のうち、カーシム、タイイブ、ターヒルおよびイブラーヒームが男の子で、ザイナブ、ルカイヤ、ウンム・クルスームおよびフアーティマが女の子だつた。

とを話したことがある。ワラカはこれに答えて、「もしそのことがほんとうならば、おおハデーじゃよ。彼はまさしくこの民族の預言者にちがいない。この民族に預言者の待望されていることを私は知っています。いまや彼の時代が来たのです」と、あるいはそれに類似したことを言った。ワラカはそのときの来るのが遅いと考え、「いつまで「待たねばならないのか」と問ひ始め、そのことについて次のような詩をよんだ。

しばしば涙をさそう心配のために、
私もそなたも追憶に耐えて来た。

彼のことはつねづねハデーじゃから聞いていた。

おおハデーじゃよ。私はすでに待つこと久しい。

そなたの言葉の実現するのを見たいという私の希望にもかかわらず、メッカの谷間で、そなたの伝えくれしキリスト教徒の修道士の言葉が、

いつわりとなることは私に耐えがたい。

いつしかマホメットがわれらを支配し、彼に議論をいどむものを打ち破り、

輝く光が国土を照らし、それによって人びとの混乱を正し、

彼に敵するものは傷を受け、

彼に味方するものは勝利者とならん（という修道士の言葉が）。

私はそのとき「彼を」目撃できるようそこにいた。

私が「彼を目撃する」最初の人となるためにクライシュ部族の憎むところのものに加わりながら、

たとえ彼らがメッカでいかに声高く叫ぼうと。彼らすべての憎む人により、私は玉座の主に至りたい。

たとえ彼らが上るべきものを下ったとしても。天空高く黄道帯を築いたもうたかたを選んだ人に、

不信をいだかないのは卑劣なことか。

もし彼らと私とが「ともに」生き延びれば、不信者どもを混乱に陥れることが起こるであらう。

もし私が死ぬことがあれば、それはすべての若者の直面しなければならぬ、滅亡と変化との運命によることだ。

預言者としての召命

神の使徒マホメットが四十歳になったとき、神は人類に対する慈悲から、彼を福音の使者としてすべての人びとのためにつかわしたもうた。神は彼（マホメ）以前につかわしたもうたすべての預言者たちと、彼（神）を確信し彼に従わぬものどもに對して彼を助け、彼ら（預言者）を確信するすべてのものにこのことを伝え、このことについての彼らの義務を果たすという契約を結びた

もうた。神はマホメットに言いたもう。「神は「マホメット以前の」預言者たちと契約を結びたもうたとき、『私がおまえたちに与えたものは聖書と知恵とである。やがてひとりの使徒（マホメ）がおまえたちのもとに来て、おまえたちのもつているものを立証し、おまえたちはかならずや彼を信じ、彼を助けることになるであらう。おまえたちは「このことを」承認し、このような条件で私の重荷、つまり私が私の約束からおまえたちに課す重荷を負うか」と問いたまい、預言者たちは『承知いたしました』と答えた。そこで神は、『それでは証言せよ。私もおまえたちといっしょに証言する』と言いたもうた。かくして神は預言者たちのすべてと、彼（神）を信じ彼に従わぬものどもに對して彼を助け、これらの二つの啓典の民のうち、彼ら（預言者）を信じるものにそのことを伝えるという契約を結びたもうた。

ズフリーが伝え聞いて述べるところによると、アイーシャは彼に次のように語ったという。「神が神の使徒さまに榮譽を、彼の信者に慈悲を与えようと欲したもうたとき、使徒さまに最初に現われた預言者たること（のしるし）は、信すべき夢でした。神の使徒さまは、それがあけぼのの光のように来るのでなければ、眠っているあいだに夢をみることはありませんでした。神は使徒さまに孤独を愛させたまい、たったひとりであること以上に、使徒さまのお好きなきとはありませんでした」